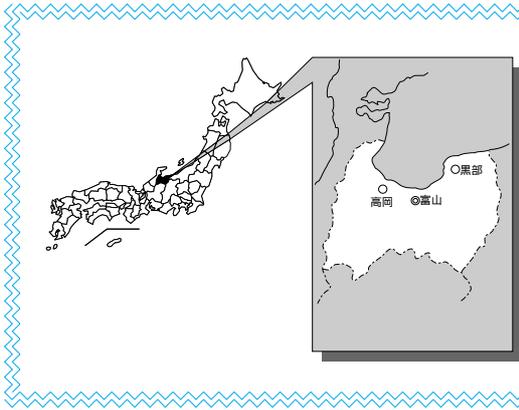


土木紀行

国指定重要文化財

富岩運河水閘施設 中島閘門

富山県富山市



中島閘門の概要

中島閘門は、富岩運河の開削にあわせて上下流の水位調整（約2.5m）のため昭和9（1934）年に建設されました。物流の中心がトラック輸送にかわるまで運河上流に誘致された工場へ原材料を運ぶ船が往来するなど、運河のシンボルとして、富山市の発展に大きな役割を果たしてきました。

平成22（2010）年4月からは、最上流にある富岩運河環水公園から河口付近の岩瀬運河を結ぶ富岩水上ラインの運航に使われ、新たな観光スポットとなっています。



写真 1 富岩運河全景

位置

延長約5.1kmの富岩運河の河口から約3.1kmに位置しています。

形式

ヨーロッパにおいて中世から近代にかけて発展した水運技術を取り入れたパナマ運河方式で、マイターゲート（合掌式ゲート）の上流扉および下

流扉で構成され、約2.5mの水位差を門扉横の通水孔（通水扉）で調整します。

閘室

閘室は、長さ約60m、幅約9m、深さ約6.3mで、石組み・鉄筋コンクリート造りとなっており、底部表面には半割の玉石が千鳥状に配置されています。



写真 2 閘室底部の玉石

門扉

門扉の主要部材は、普通鋼によるスキンプレート・横桁・立桁で構成され、今ではめずらしいり



写真 3 門扉のリベット

ベット（約15,000本）で接合されており、水密部には檜が使用されています。

中島閘門の沿革

昭和3（1928）年に県施行の運河・街路・土地区画整理事業からなる富山都市計画事業が、都市計画決定されました。この事業は、運河沿岸に工業地域を形成するとともに、運河を開削した土砂を神通川廃川地に埋め立て新市街地を形成するもので、富山市の近代化に大きな役割を果たし、現在の富山市の姿を形づくり、発展の源となった大事業でした。

この壮大な計画のもと、富岩運河は昭和5年から建設を始め、中島閘門が昭和9年に完成し、富岩運河が昭和10年に竣工しました。

中島閘門は、昭和9年に設置された後、六十数年が経過し一度も改修されておらず、老朽化が著しかったことから、復元工事を進め、平成10（1998）年に完成しました。



写真 4 中島閘門全景

重要文化財指定

特 徴

わが国で数少ない都市計画事業による運河閘門で、関連施設が良好に保存されており、わが国の都市計画史上、貴重な施設です。

コンクリート、鉄筋コンクリート、石を適所に使い分けた建築技術は、昭和初期の土木施工技術の高い完成度を示すものとして貴重です。

平成8、9年度に富山県が実施した改修事業により閘門の動態的な保存が図られました。

指定の意義

昭和初期の土木構造物としては全国初の重要文化財です。

中島閘門に象徴される郷土の優れた近代化遺産が、全国的な評価を受け、先人の偉業の継承に努めてきた富山県の熱意が認められたものです。

賑わいの創出

「富岩水上ライン」として、都心のオアシス「富岩運河環水公園」から「中島閘門」を経て、港町「岩瀬」までを二酸化炭素を排出しない環境に優しいソーラー船「sora」と電気ボート「もみじ」が案内しています。



写真 5 ソーラー船「sora」

また、地域住民等で組織されている「運河のまちを愛する会」（平成16年設立）によるイベント（運河まつり）が開催されるなど、富岩運河の利活用が図られています。



写真 6 運河まつり